

# 平賀元義の足跡と歌碑について

会員 井上秀男

## 1. 平賀元義と先祖平賀氏について

備前国に幕末から維新に至る激動の頃、万葉歌人・国学者として備前・備中・美作地方を放浪して、700首におよぶ万葉調の和歌を作ったのこしている人物がいた。その人は平賀元義である。

和歌は賀茂真淵に私淑する。この平賀元義を世に紹介したのが、明治の短歌改革者の正岡子規である。「血を吐きし 病の床の つれづれに 元義の歌 よめばうれしも」と詠った。明治34年「平賀元義の歌」の一文を、遺した。墨汁一滴のためにそうした正岡子規が居なかったら、平賀元義という歌人は知られることが無かったと言われている。また正岡子規の死後、元義の作品を取り上げて賞揚した歌人の一人に斎藤茂吉がいたことを、忘れてはならない。

平賀元義の略伝については、元義は寛政12年(1800)7月3日母の実家の備中下道郡陶村枝檜(現在、倉敷市玉島陶)百本家に生れる。母の名前は八重、後に代子と改める。代子の父親は百本平兵衛忠之である。

平賀元義は備前岡山藩の中老池田志津摩憲成(食禄4000石)の老臣、平尾新兵衛長春(秩禄130石)の長子である平尾新兵衛源長春に、生れて3か月で岡山市富田町の父宅に引き取られ、翌年の享和元年に嫡子となる。幼名を猪之助と称していた。後に丹介、喜左衛門とも称し、実名は直満、義元、直元、長元等を称している。興津長八郎藤原重之の厄介人となるに及んで、興津新吉、長元等とも名乗った。

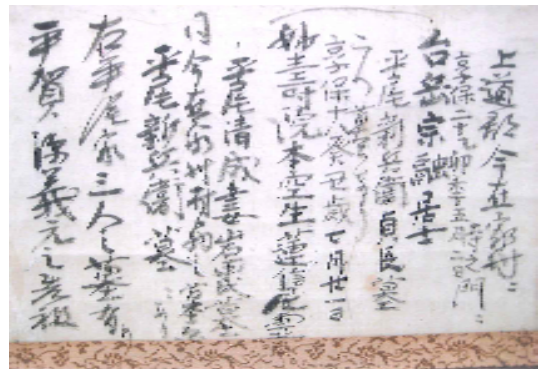
天保3年(1832)12月元義33才の時に退去を願い出て岡山を去る。本姓の平賀に復して自筆、奥書に平賀左衛門太郎源元義・平賀七蔵源元義と名乗っている。

平賀元義の先祖については、慶応元年(1865)12月の元義自筆の「先祖書上」等によると、姓平賀は信濃国佐久郡平賀村に居住していたので、平賀氏を名乗っていたが。

元義から12代祖の平賀大膳大進義種が備前国赤坂郡周匝郷山方村是里(現在は赤磐市是里)字名本村(ほむら)にある山鳥城に在城していたが、後に赤磐郡仁掘東村徳近に出城として徳近城を築いて、当時の守護赤松家ならびに守護代浦上家に任えていた。また元義から11代先祖の平賀左衛門次郎義兼も、最初、是里の山鳥城に居たが後に仁掘東村の平尾の小城に移ったと平賀系図に記されている。

山鳥城は私の実家の庭から南方面に見える本村(ほむら)という集落にある標高312mの小高い山が山鳥城であり、父から「あの山が山鳥城で万葉歌人の平賀元義の先祖の居城していた場所であると、良く聞かされていた。

私は平賀元義が書いた先祖書と思われる文面資料を所有して居ます。下記の写真です。



筆者所蔵の先祖書

内容は元義から5代祖の平尾新兵衛貞長の没年月日と法名と墓地の場所が記されている。平尾新兵衛貞長享保20年(1735)5月2日没、享年56才、法名は台岳宗融居士と記され、元義から6代祖の平尾清成の妻、岩田氏の墓として没年享保18年(1733)7月21日法名妙壽院本空生蓮信尼靈、平尾新兵衛墓にあり右平尾家三人の墓あり、平賀源義元の先祖と書かれている。

羽生永明著「平賀元義」の平尾家系図を参照して、没年月日、法名を照合した結果、間違いなく書かれています。先祖書の補足として平尾新兵衛貞長の父清成の幼名は猪之介正保3年（1646）に出生し元禄8年（1695）12月22日に没し、今在家の花蔵坊に葬られている。平尾新兵衛清成の妻は岩田市郎衛門の娘である。名前は夏子という。夫清成の没後妙寿院と称して享年86歳で没している。

## 2.赤磐市の元義の歌碑

赤磐市周匝（すさい）に諏訪神社が鎮座している。この神社近くに周匝公民館があって、その横の場所に平賀元義の歌碑が建っている。



筆者撮影 元義の歌碑

先ず諏訪神社についての縁起、または所伝によると、貞和年間（1345）に平賀三郎信治が、足利將軍より仁堀庄を賜って備前国赤坂郡を支配するに及び、旧赤坂郡吉井町是里の神ノ峯に信濃国から諏訪明神を勧請して、平賀三郎信治から2代目後裔の平賀大膳大進義種に至って山鳥城の東方に社地を造って諏訪明神を祀っていたが、天文21年（1552）に尼子氏に攻められ落城の際に、諏訪明神のご神体を山鳥城の眼下の滝山川へ敵兵が投じたと伝えられている。その後滝山川を下った周匝の小字の小モノ矢田という場所に御神体が漂着しているのを周匝の住人の宇野某（それがし）が発見し、菰（こも）を敷き竹の矢来を作って、生鮎を供えて祀り、その後現在地

に社殿を建立して、奉祭してきたのが周匝の諏訪神社の由来である。

明治40年村社に指定、終戦後昭和27年宗教法人法により、氏子達によって管理されている。江戸時代には藩老池田家より社領として田高八斗の寄進を受けていた。私も幼い頃、諏訪神社の夏祭りを楽しみにしていた。その頃は盛大で盆踊り相撲大会、夜店が出て地元では「お諏訪祭」と呼んでいる田舎の夏祭りである。

諏訪明神を祀っていた平賀氏の先祖と子孫の平賀元義の関係から、周匝の諏訪神社の近くに平賀元義の周匝で詠んだ和歌の歌碑が建立されている。左の写真の歌碑には

「周匝路の 堤の木の間 わけくれば  
天橋立 行く心地せり」

と刻んで、平成元年周寿会と記してある。この和歌は赤磐市福田地区から吉井川に沿って、周匝橋方面に土手堤があつて千本松の松並木と呼ばれていたと昔人から聴いた。今は、松の木は一本も無いが、元義の居たころには、松並木があつたのだろう。私は以前に古い写真で見た記憶がある。

## 3.矢吹家と楯之舎塾と歌碑について

安政4年（1857）平賀元義58歳の時に久米郡柵原町飯岡多門坂田の地に「楯之舎塾」を創設する。



飯岡楯之舎塾の歌碑

この時平賀元義の高弟でもある、旧久米郡

柵原町行信の矢吹林太郎田使経正が尽力して、楯之舎塾が創設された。矢吹経正は嘉永元年（1848）8月7日に元義に入門している。楯之舎塾開設当時には、門人が80名ぐらいの人数に達していた。飯岡での門人として田尻脩平・小林数馬・角南泰之助・最上慎助等の名前が見られる。しかしこの楯之舎塾も経費の面で続かなくて安政6年（1859）の正月楯之舎塾を閉鎖して、平賀元義は久米郡柵原町行信に住む門人の矢吹経正の家に移る。平賀元義が安政5年（1858）5月13日に飯岡で詠んだ和歌が歌碑として楯之舎塾跡に建てられている。飯岡の月の輪古墳の見える場所に

「山風に 河風そひて 飯岡の

坂田の御田は 涼しかりけれ」

と詠んだ歌碑である。歌碑には昭和42年7月柵原町教育委員会と楯之舎塾に尽力した矢吹林太郎田使経正の曾孫に当たる矢吹修氏が建立したと記されている。この歌碑の裏面には当時岡大教授の藤井駿先生の撰文によって楯之舎塾の由来について記されている。また矢吹修氏は平賀文庫所蔵者として有名である。矢吹家所有の江戸期初期から大庄屋として世襲のあらゆる文書・記録類を整理され、昭和35年に『近世作南農村資料』巻Iを翌年に巻IIを著書にされ、昭和48年には矢吹家蔵の全部の文書・記録類をマイクロフィルムに収めて、岡山県総合文化センターに寄贈され、昭和51年に『矢吹家文書目録』を編集されている。矢吹修氏の著書を所有しているので、今回参考資料として再読しました。

#### 4. 矢吹家文書目録と平賀元義文献資料

矢吹家文書目録として、元義の文献資料が長さ76cm幅45cm高さ41cmの木箱に保管されている。この文献資料が矢吹家にあるのは、慶応元年（1865）平賀元義没後、長男の源大が久米郡柵原町行信の矢吹家に遺言・遺墨類を委託したうえで、藩士の加藤峰之進の養子

になっていたが、故あって離縁して亡命する。その後京阪神方面に20年間放浪して、長浜義則と称して和気郡本荘村衣笠に帰郷して住居している。その源大（元義の長男）が矢吹家に委託されたものが残っている。



平賀文庫の写真

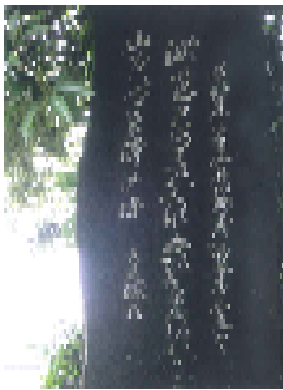
それらの委託された文献資料を羽生永明氏（1869～1930）＝元義研究家が明治大正にかけて分類・整理されたのが『平賀文庫』として保管されている。

平賀元義の万葉調の歌が明治34年（1901）正岡子規（1869～1902）に認められ、その歌は元義研究家達によって、蒐集せられ、大正14年（1925）には羽生永明著の『注解平賀元義歌集』として出版され、斉藤茂吉・杉鮫太郎共著の『平賀元義歌集』**岩波文庫昭和13年6月刊** 藤本実編『編注平賀元義歌集』**角川文庫昭和34年刊** 等が出版され、その後杉鮫太郎著『平賀元義の歌』**S52年出版**、『平賀元義 歌と書』**S55年限定500部**。編者としては赤木和彦・大岩徳二・小森一郎・正務弘などによって出版されている。『岡山文庫（231）』の中に『平賀元義を歩く』**渡辺秀人・竹内祐宣著平成16年**『平賀元義論考』**紺屋峻著作 S54年**などの諸本が出版されている。このように元義研究についての文献資料本があることに気付かされた。

## 5.宗形神社と元義の歌碑について

宗形神社は赤磐市是里字大宮山 32535 番地に鎮座している延喜式内の古社であり、大宮山はもと巻ノ宗とも呼ばれている。祭神は多紀理比売命・市杵島比売命・多岐都比売命の三女神である神祇志料に、備前赤坂郡山方上下七ヶ村の氏神と見える。縁起に人皇第 10 代崇神天皇の御代の鎮座で古くは山方大宮、是里大宮と称されていた。人皇第 16 代仁徳天皇が吉備国に行幸せられた時に、海部直の女黒姫を慕われて古歌として「山方にまける青菜も吉備人とともにし摘めば楽しくある」と詠まれた伝説の地である。

この宗形神社の境内に平賀元義の歌碑を建立しようと、昭和 5 5 年 1 0 月宗形神社奉賛会なるものを設立し、その事業の一つとして元義の歌碑を建立することが決定して、昭和 5 6 年春、石碑建立者・協賛者・地元の多数の参加者が集まって平賀元義歌碑序幕式が開催され、私も故郷であり参加しました。



宗形神社境内の歌碑

歌碑となった元義の和歌は宗形神社の縁起などについてよく知っている元義である。仁徳天皇の古歌に因(ちなん)で詠んだ和歌で、詞書に安政四年(1857)正月四日備前国別業にてとして

「大君の 春はくれども 青菜つむ

わが山方は 雪はふりける」

の和歌を詠んでいる。この和歌を歌碑として建立された次第です。

この歌碑の奉献者として高坂義一氏の尽力を忘れてはならない。高坂氏は和気郡佐伯町

北山方の出身で、高坂石彫工芸(株)を設立され、昭和 4 2 年業務拡張に伴って茨城県真壁郡間壁町亀熊 1848 番地へ移られる。昭和 4 4 年 6 月硫黄島戦没者顕彰碑を製作された。

実は高坂義一氏の先祖は、武田信玄の重臣で高坂家中興の祖、高坂弾正昌信でその子孫である。高坂氏は昭和 5 3 年 8 月から私財を投じ、子息と共に 1 ヶ年をかけて精魂を込めて高さ 8 m の平和観音像を制作して、高坂弾正昌信公の菩提寺の信濃長野市松代町豊栄の龍潭山明徳寺に寄進し、寺域の拡張・参道の改修後位置を定めて、奉安し落慶供養をする等功績をつままれた。

その後高坂氏は自分の先祖のルーツを求めて全国の高坂氏についての資料を集めて、各県地方を車で走行され、車 2 台を乗り潰したと、当時の信濃新聞に報じられたといわれている。その一念が通じて、長野県下伊那郡大鹿村大河原に 9 6 代の後醍醐天皇の皇子宗良親王(編者注=その子尹良親王の末裔が岡山に雪吉の姓で活躍中)に仕えた、南朝の忠臣香坂美作守高宗公が応永 1 4 年(1407) 3 月 2 7 日に没し、墳墓があることを知り、香坂高宗公の碑を建設を計画され、四方八方を石材を求めらる中で、茨城と福島県の県境付近で黒花崗岩を見つけ、その石材を購入して四つ割にし、一つは香坂高宗公の碑を造り、二つ目は宗良親王墳墓のある、静岡県引佐郡引佐町伊谷に運んで宗良親王の肖像と和歌を刻み建立された。

残りの一個が宗形神社に建立された平賀元義の歌碑に使用された石材である。高坂氏が遠路茨城県から岡山県まで自費で運搬され奉献されたのである。“きび考” 8 号に「宗良親王と南朝の忠臣の動向」と題して寄稿文として居ます。宗良親王と香坂美作守高宗の関係について触れて書いております。

平賀氏は信濃国佐久郡平賀村に居住していたので平賀を名乗った。平賀元義の先祖は信濃国。宗形神社の元義歌碑の奉献者の高坂氏の先祖の香坂美作守高宗も長野県下伊那郡大

鹿村大河原に墓石があり先祖は信濃国である。又平賀元義の研究者である羽生永明氏は長野県下伊那郡の出身者で偶然がかさなっている。彼は大正4年『注解 平賀元義歌集』を出版されている。羽生永明氏は故郷の郷土史研究にも尽力され『下伊那郡誌稿』17冊と『伊那人物私稿』18冊などの資料を残されている。

故郷の宗形神社境内に平賀元義歌碑が建立されてから、34年の年月が流れる。久しぶりに歌碑の前に立って除幕式の当日のことを思い浮かべて、歌碑の写真を数枚写して帰った。飯岡の楯之舎塾の跡地にも足を運んでみた。碑の横にある木が大きく茂っていた。今から157年まえの安政4年（1857）楯之舎塾が開設された当時の門人達は、何を思い何を求めてこの地に足を運んでいたのであろうか。幕末から明治に至る時代の中で、万葉調の歌人として国学者として、備前備中美作の各地の人々と交流をもつての遍歴を通しての、元義66歳の生涯であった。

私の故郷には平賀元義の足跡の地があつて今回寄稿文として取り上げてみた。この文面を書くに当たって諸氏の出版された文献資料を参照させていただきました。

- 参考文献資料**
- ①『平賀元義』 羽生永明著
  - ②『平賀元義歌と書』
  - ③『平賀元義の歌』 杉鮫太郎著
  - ④『矢吹家文書目録』 矢吹修著
- その他本文中に記載しました。